

論 文

# 縁組による人口移動

—摂津国下嶋郡下新田村の場合—

津 川 正 幸

## はじめに

吹田市史第三巻の明治期と大正期の一部の執筆を分担し、ようやくその稿を終り、そのうち村落生活の変貌—とくに人口移動にかかわる自分の記述をふりかえり、同吹田市史第二巻の第2章近世中期の吹田—第4節農民生活と文化—第二項村落生活の変貌の中での「家と相続」<sup>1)</sup>・「通婚圏」<sup>2)</sup>のなかで小林茂氏の述べられたすぐれた記述にくらべて、なお疑問に思われる点があり、小林氏に取り扱われた時代に近い吹田市域の他村の事例によって比較検討を試みようとしたのが本稿である。

利用した史料は「明治五申歳民籍取調帳嶋下郡五区六番組合下新田村」(樋口家文書)であるが、同帳に記載された世帯数53軒、移動記事は文化元年(1804)から明治12年(1879)までの75年間におよんでいる。

### 東村・吹田村竹中領の場合

さて、小林氏は「家と相続」項で次のように述べている。

「近世では武士だけではなく、農民にあっても家の観念は強かった。先祖代

1) 吹田市史第2巻 280ページ

2) 同上 283ページ

々の家を存続させ、家名を興すことが勤めとされたのである。したがって、家名存続のために養子縁組は多かった。宝暦3年(1753)2月、東村百姓半兵衛は、大坂天満菅原町山田屋又兵衛の子、31歳になる九郎兵衛を養子に、同じく東村甚右衛門は、別府村九右衛門の娘4歳のさんを養女にしたいと願いを出し、また東村又兵衛の後家も、大坂天満菅原町中島屋太郎兵衛の弟、34歳になる長兵衛を養子にしたいと願いを出している。(竹原秀三文書)

このように、養子縁組が二月中に行われたのは農閑期のためであろうが、大坂との縁組が二例あるのは興味深い。いずれにしても一村で一カ月間に三組の縁組がなされるのは、家相続を大事とした当時の人々の心情によるものであったろう。もちろん結婚を含めて、縁組には家格が釣りあうことが必須条件であった。それは家と家との縁組であって、本人同士の関係が中心でなかったためであった。」

また、「通婚圏」の項には、

「人口移動がどうであったか、吹田村竹中領の「人別出入帳」によってみることにしよう。同帳の天保十三年(1842)～嘉永四年(1851)と安政六年(1859)～明治元年(1868)の二期10か年間の人別出入について、移動の事由、および移出入先を吹田からの距離圏で表示したものが、表80<sup>3)</sup>である。

まず、前期で目につくのは、移入者が移出者よりも多いこと、通婚圏が狭いこと、養子が多いことである。後期の分では、移出者が移入者よりも断然多く結婚によって出ていく者よりも、養子として出ていく者が目立って多い。しかも遠隔の地方に出ている。これらの点からも幕藩社会が大きく崩れていこうとする姿がわかるのである。」

と述べている。確かに、当時の生活は家中心であって、家名存続、家名を興すことが大切であったが、そのことのみによって養子縁組、婚姻縁組がなされたのか、その場合、いわれるように「釣り合わぬは不縁のもと」、家格が釣り

---

3) 吹田市史第2巻 284ページ

表80 吹田村竹中領移出入表

年 代	距離別	移 入					移 出				
		結婚	養子	不縁	その他	計	結婚	養子	不縁	その他	計
天保13年 (1842) } 嘉永4年 (1851)	I	19	14	5	6	44	16	11	3	4	34
	II	6			1	7	4	4		1	9
	III	8	3		6	17	2	3			5
	IV	3				3	6	4			10
	計	36	17	5	13	71	28	22	3	5	58
安政6年 (1859) } 明治元年 (1868)	I	22	3	7	5	37	41	30	6	5	82
	II	11	4	1	1	17	12	6	2		20
	III	11	5	1	3	20	5	2		2	9
	IV	1	2			3	9	4		2	15
	計	45	14	9	9	77	67	42	8	9	126

（注）「人別出入帳」から作成した。田中太郎文書

距離は、吹田村を中心として同心円的に測定したもの。

I 3キロ程度 II 5キロ程度 III 10キロ程度 IV それ以上  
 その他は同居・引越し・乳母奉公・未詳などである。

あうことが心須条件であったか。家格とは何か、何をもって評価したか。

1842～51年にみられる移入者が上廻り、通婚圏が狭く、養子が多いことは何故か、1858～1868年にみられるように、移出者が上廻り、結婚よりも養子として出てゆくものが断然多く、遠隔の地方に出ていくとされているのは何故か。近隣の村落でも同じような傾向がみられるかどうか。などの疑問がもたれるところである。

### 下新田村の場合

まず、前掲「民籍取調帳」によって、縁組された当人の出身地域別に集計したのが第1表(取り方)、縁組した先方の地域別に集計したのが第2表(遣り方)である。

これら2表と吹田竹中領表80とを比較するにも、下新田村の場合は世帯数53戸、吹田竹中領の場合は230戸余で、基礎戸数に大差があるが、それにしても

第1表 地域別縁組件数表(取り方)

地域 続柄	当村	同区	島下	島上	豊島	川辺	西成	大阪	丹波	近江	計
父					1						1
当主	3	2	2		1(1)	(1)		1	2		11(2)
小計	3	2	2		2(1)	(1)		1	2		12(2)
祖母						1					1
母	5	3	1		4	3			2		18
妻	5	7	1		11	1	3	3	2	1	34
長男妻					1						1
小計	10	10	2		16	4	3	3	4	1	54
合計	13	12	4		18(1)	5(1)	3	4	6	1	66(2)

註( )内は養子で外数

第2表 地域別縁組件数表(遣り方)

地域 続柄	同村	同区	島下	島上	豊島	川辺	西成	大阪	小計
伯叔父			1				1	1	3
兄		1			2				3
弟	1	8			1	2		2	14
息子	1						1		2
小計	2	9	1		3	2	2	3	22
伯叔母		3			2	2		2	9
姉		5		1	3	1			10
妹	5	4	2	1	5	2	2		21
娘	2	1	1		3			1	8
小計	7	13	3	2	13	5	2	3	48
分家	6								6
合計	15	22	4	2	16	7	4	6	76

第3表 移出入表

年 代	移 入		移 出	
	結 婚	養 子	結 婚	養 子
1842—51年	10	4	6	1
1859—68年	8	1	10	10

大雑把な傾向としていえることは、下新田村では移入者68名に対して移出者70名で、大体バランスが保たれているということである。ちなみに下新田村について竹中領の前期・後期にみあう年代の件数のみをとってみると、第3表のとおり、前期においては移入者が移出者を上回り、後期においては逆に移出者が移入者を上回って吹田竹中領と同じ傾向がみられるが、年代の隔った10か年を区切って、移入、移出を比較することはあまり意味がなく、やはり連続する長期間の比較においてはじめてそれらしい傾向がみられるのではないかと考えられる。

次に移入・移出において、結婚によるか、養子によるかの何れの事由によって移動するものが多いかについても、下新田村の場合は吹田竹中領のような傾向はみられず、前期は移入・移出ともに結婚による移動が多く、後期についても移入は結婚が多く、移出は結婚・養子が同数である。これを全期にとってみても、(遣り方)第2表にみられるとおり、養子縁組22件、婚姻縁組48件で後者が倍数上回っている。

(取り方)第1表についても同様であって、養子縁組14件、婚姻縁組54件とやはり後者が約4倍に上回っている。しかも(遣り方)養子縁組の場合、必ずしも遠隔地に出てゆくのではなく、22件のうち、同村・同区内での養子縁組が11件で他の11件も遠隔地ではない。ちなみに、縁組先の郡村名をみると、

同区（嶋下郡5区）

岸部一小路村（1番組）、東村、七尾村（2番組）、山田下村東組（3番組）、山田下村西組（4番組）、山田小川村、山田中村、山田別所村（5番組）、上新田村（6

番組), 山田上村(7番組), 千里一佐井寺村(8番組), 片山村(9番組), 吹田一吹田村東組・竹中領(10番組), 吹田村西組・柘植領(11番組), 吹田村中組・仙洞御料(12番組)約4km

#### 島下郡

味舌上村(摂津市), 鮎川村, 真砂村, 西藏垣内村, 茨木村(茨木市)約8km

#### 島上郡

野田村, 高槻村(高槻市)約14km

#### 豊島郡

垂水村, 榎坂村(吹田市), 熊野田村 約1.5km, 寺内村, 長興寺村, 石蓮寺村, 浜村 約2km, 小曾根村, 曾根村, 箕輪村, 岡山村, 穂積村, 野畑村, 原田村, 南刀根山村(豊中市)約4~5km, 今宮村(箕面市)約5km, 西市場村(池田市)約6.5km

#### 川辺郡

上食満村(尼崎市)約6km, 酒井村(伊丹市)約6km, 久代村, 栄根村, 小戸村, 丸橋村, 東畦野村(川西市)約9~14km

#### 西成郡

三津屋村, 新庄村, 曾根崎村

#### 大阪市中

天満木幡町, 天満11町目, 淡路町, 豊後町, 曾根崎新地, 農人橋詰町, 京町堀上通り

下新田村の所在が東は佐井寺村, 西は熊野田村, 南は寺内村, 北は上新田村に接し, むしろ西南の豊島郡に近く開けた村である立地条件から, 島下・島上郡よりも, 豊島・川辺郡が近距離に感じられるわけで, 近江, 丹波をのぞいて一番遠隔地と考えられる高槻・東畦野にしても, 下新田村からは矢道にして15km—4里の道程であって, ゆうに1日に往復しうる距離であって遠隔地とはいえないへだたりである。しかも所領関係, 米穀流通関係からみて, 小林茂

氏の研究にみられるとおり<sup>4)</sup>、淀藩領の郷払米からみて、豊島・川辺、嶋下郡は同じ経済圏であり、淀領、旗本領、天領地で入組支配地もあり、非領国（地域）であって<sup>5)</sup>、比較的移動の容易な地域間であっただけに、遠隔地という感じの薄い地域であったといえるであろう。

また、縁組は地縁によるよりも、血縁による場合がかなりにみられる。養子縁組の場合をみると、H-1家は、妻の実家に長男を養子に出している。Y'-3は、母の実家に弟を養子とし、H-2家は、母が川辺郡東畦野村からきていることから、弟を川辺郡丸橋村に養子に出している。また婚姻についても、S-1家は伯母2人とも川辺郡上食満村I家にとつがせ、O-1家は、母、妻、伯母の3人が同じ垂水村のG家との縁組であること。T-1家は、祖母が川辺郡栄根村から、母と妻は川辺郡小戸村K家からとの関係から、妹は川辺郡久代村へ縁付かせるなど4代にわたって同じ地域との縁組みをなしていることなどから、おそらく多くの場合になんらかの血縁関係から縁組がなされたであろうことが推察されるが、姻籍関係の詳細を跡づけることが困難なので、この点は後日の問題に残しておく。

#### 月別縁組件数について

今日では、結婚式場に当てられるホテル、会館、専門式場、公民館、神社、寺院などの宴会場に冷暖房設備が完備したので、寒暑や暦の六輝（大安、赤口、先勝、友引、先負、仏滅）や雑節を問わず年中挙式がみられるが、農耕を主とする時代の農業地域においては、農繁期をさけて、2月、3月の農閑期と10月、11月、12月の収穫期の後におこなわれるものと常識的に考えている。果してそうであったかの好奇心にかられて、下新田村の場合について集計したのが第4表である。

4) 吹田市史第2巻、豊中市史第2巻。

5) 安岡重明、作道洋太郎両氏の説による。

第4表 月別縁組件数表

月 続柄	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	不明	計
当主		3	1	2				3	3			3	1	16
伯叔父		1		1				1						3
兄弟、息		3	3(1)	7(3)		1		1	2	1	4(1)	1	2(1)	25(6)
小計		7	4(1)	10(3)		1		5	5	1	4(1)	4	3(1)	44(6)
母		3	3	4	1	1		1		1	1	3	1	19
妻		15	1	4	1		1	3	2	2	2	2	2	35
伯叔母		3		2					2		1	1		9
姉妹、娘		12	5	3	2	1		4	5		4	2	2	40
小計		33	9	13	4	2	1	8	9	3	8	8	5	103
合計	0	40	13(1)	23(3)	4	3	1	13	14	4	12(1)	12	8(1)	177(6)

註（ ）内は養子で外数

これによると、皆無の月は正月、次いで少ないのが7月、6月、5月の順であるが、梅雨、暑中、いいかえると麦蒔り、田植、田草取りの農繁期である。しかし皆無ではない。圧倒的に多いのがやはり2月、次いで多いのが4月9月、3月、8月の順である。ただし、男子一養子の場合は4月が多く、分家も4月が多い。いずれにしても、農繁期をさけて農閑期に多いとの常識は下新田村の場合については当をえている。

#### 縁組の必須条件

さて、最後に、縁組みは結婚にしても養子縁組みにしても、「釣りあわぬは不縁のもと」といわれ、他方では「玉の輿」といわれる家格のかけ離れた縁組も中にはある。しかし一般には、仲人をたて、釣書を交換し、聞合せ、見合いの手続を経て縁組がなされとなると、家と家との交際につながるとなれば、家と家との釣り合いが重視され、そうあることが望ましいには違いない。家格によってとはいえ、村役人層、上農層、中農層、貧農層と持高によって区分

する農民階層と、宮座、役家、門地、門閥による家格の評価とは必ずしも一致しない。しかし、家格をはかるに由緒、系図を知り難いとすれば、基本的には所持田畑反畝歩の多寡、家持であるか否か、役畜の所有の有無それらをいかに持ちこたえたか、など経済的な要素と家族の経済性によってはかられるであろうと仮定して、下新田村の場合について、同一村内での（取り方）の場合と（遣り方）の場合を、経済的な要素によってみると次のとおりになる。（家持は○印、借地・借家は△印、牛所有は□印とし、所持反別の単位を畝で表示する。）

## （取り方）

## 当主養子の場合

H家	○□	179.19	←	S—1家	○□	193.02
K'—4家	○	40.20	←	K'—3家	○□	98.03
SS家		0	←	K—1家	○□	27.01

## 母の場合

K—2家	○□	54.26	←	M家	○□	14.03
Y—1家	○□	171.25	←	SK家	○□	9.03
Y—2家	○□	29.06	←	K'—1家	○□	94.10
O—2家	○□	279.15	←	Y—1家	○□	118.09
O'家	△	0	←	O—1家	○□	150.22

## 妻の場合

Y'—2家	○□	25.07	←	K'—1家	○□	94.10
S—3家	○□	70.13	←	O'家	△	0
S—4家	○□	52.03	←	S—3家	○□	70.13
k—2家	△	0	←	M家	○□	14.03
y—3家	□	0	←	y—2家	○□	29.06
(養女)H家	○□	179.19	←	S—1家	○□	193.02

## （遣り方）

## 男子養子の場合

K'—3家 ○□ 98.03 → K'—4家 ○ 40.20

N'—1家 ○ 0 → N'—2家 △ 0

女子嫁入りの場合

Y—1家 ○□ 118.09 → O—2家 ○□ 279.15

H家 ○□ 179.19 → S—1家 ○□ 193.02

I—1家 ○□ 34.20 → Y—2家 ○□ 29.06

O'家 0 → S—3家 ○□ 70.13

S—3家 ○□ 70.13 → S—4家 ○□ 52.03

U家 △ 0 → D—1家 △ 0

X家 △ 0 → U家 △ 0

以上にみられるとおり一、二の例外はあるとしても、養子縁組の場合は(取り方)・(遣り方)いずれの場合も、所持反畝歩の多い家から、少ない家への養子入りで、家名存続とはいえ、田畑を分地して経営規模を縮小することをさけ、家持の家と養子縁組をしていることが判明する。このことは、分家6件のいずれにも分地していないことでもうなずけるわけである。これとは逆に結婚の場合は、それぞれの時代の政治・経済情勢によると思われるが、母の場合は少から多へ、妻の場合は多から少へ、ただS—1家からH家の場合が例外で(H家は夫婦養子で)養女に出しているからである。姉・妹、娘の嫁入りの場合も大半は、少所有者から多所有者の家への嫁入りである。所有反畝歩の差の大なる場合は、母の場合のY—1家からO—2家へ継母に嫁入ったかわりに、同年に妹がO—2家からY—1家へ嫁入っている取りかえ縁組みがなされている例外的なものである。以上でしれることは、取り方としては、より良い家から、遣り方としては、より良い家への願望が、財産、親籍関係、人柄などを総合して、こうした形で縁組みがなされていることで、男子の場合に分家よりも養子が多くそれも相手方が自家よりも田畑所持面積が少なくとも養子に出すところに一つの特長があらわれていることである。

## 付 録

## 民籍取調帳概略

家別	男	女	計	持家	借地	借家	牛	町反畝・歩	縁 組 (年月・取組先)
H-1	2	2	4	○			1	617.27	当主 1843年9月 同区南村N家ヨリ養子 妻 1845年2月 西成郡5区四津屋村N家ヨリ娶 長男 1819年4月 西成郡5区三津屋村N家へ養子
H-2	3	3	6	○			1	341.05	母 1823年12月 川辺郡東畦野村I家ヨリ娶 妻 1858年5月 豊島郡3区垂水村I家ヨリ娶 姉 1849年2月 同区吹田村H家へ嫁 兄 1862年11月 豊島郡3区浜村S家養子 弟 1862年12月 川辺郡3区丸橋村S家養子 弟 1865年4月 同区吹田村H家養子
Y-1	4	4	8	○			1	118.09	妻 1845年12月 同区七尾村S家ヨリ娶 長男妻 1873年2月 豊島郡2区岡山村N家ヨリ娶 妹 1851年11月 同区吹田村F家嫁 妹 1850年4月 当村O-2家へ嫁 弟 1866年4月 当村Y家弟分家
Y-2	3	1	4	○			1	59.26	
S-1	2	2	4	○			1	193.02	母 1853年6月 豊島郡3区榎坂村N家ヨリ娶 養女 1869年3月 当村H家へ養女 伯母 1863年2月 同区山田下村I家嫁 伯母 1857年9月 川辺郡上食満村I家嫁 伯母 1893年9月 川辺郡上食満村I家倅ニ嫁
S-2	3	1	4	○			1	110.19	母 1852年4月 川辺郡12区小戸村N家ヨリ娶 伯父 1873年2月 西成郡3区曾根崎村Y家養子 姉 1873年3月 島上郡2区高槻村I家嫁 伯父 1859年8月 大阪京町堀上通3S家へ養子
Y'-1	2	2	4	○			1	72.08	当主 1861年12月 同郡4区味舌上村I家ヨリ養子 母 1841年3月 当区上新田村Y家ヨリ娶
O-1	2	1	3	○			1	150.22	母 1824年12月 豊島郡3区垂水村G家ヨリ娶 妻 1858年2月 豊島郡3区垂水村G家ヨリ娶 伯母 1826年11月 豊島郡3区垂水村G家嫁 兄 1854年4月 当村ニテ分家
Y'-2	3	5	8	○			1	25.07	妻 1846年2月 当村K'-1家ヨリ娶 姉 1878年9月 豊島郡榎坂村Y家嫁

家別	男	女	計	持家	借地	借家	牛	町反畝・歩	縁組 (年月・取組先)
Y'-3	4	4	8	○			1	63.24	妻 1865年2月 同区山田中村O家ヨリ娶 姉 1846年 豊島郡垂水村S家嫁 弟 1852年3月 大阪東大組淡路町S家養子 弟 1868年4月 豊島郡箕輪村N家養子 弟 1867年2月 同区片山村I家養子 妹 1868年9月 豊島郡2区長興寺村N家嫁
S-3	4	2	6	○			1	70.13	母 1832年 豊島郡榎坂村H家ヨリ娶 妻 1856年2月 同村O'家ヨリ娶 妹 1865年4月 同区東村O'家嫁 妹 1869年11月 豊島郡石蓮寺村K家嫁 弟 1876年4月 同区東村O家養子 妹 1840年11月 同村S-4家嫁
S-4	5	4	9	○			1	52.03	妻 1840年11月 同村S-3家ヨリ娶 養子 1869年4月 豊島郡榎坂村O家ヨリ入 娘 1874年 豊島郡3区石蓮寺K家嫁
K-1	2	2	4	○			1	27.01	妻 1858年2月 大阪市東大区農人橋詰町N家娶
T	2	2	○				1	30.00	父 1837年8月 豊島郡榎坂村N家養子 母 1825年3月 丹波桑田郡河原地村ヨリ娶 妻 1851年8月 同区上新田村T家ヨリ娶
O-2	5	4	9	○			1	279.15	継母 1850年4月 同村Y-1家ヨリ娶 妻 1860年3月 西成郡三津屋村S家ヨリ娶 妹 1856年9月 同郡2区鮎川村A家嫁 妹 1861年2月 西成郡三津屋村妻実家ニ嫁
N-1	2	3	5	○			1	64.07	妻 1863年9月 豊島郡3区垂水村M家ヨリ娶 姉 1840年12月 同区吹田村S家嫁
T-1	2	3	5	○			1	231.00	祖母 1804年11月 川辺郡栄根村K家ヨリ娶 母 1822年2月 川辺郡小戸村K家ヨリ娶 妻 1862年10月 川辺郡小戸村K家ヨリ娶 妹 1868年11月 川辺郡13区久代村嫁
Y'-3	2	6	8	○			1	30.23	母 1828年12月 同区佐井村Y家ヨリ娶 妻 1853年2月 豊島郡1区今宮村H家ヨリ娶 弟 1862年8月 同区佐井寺村母実家ニ養子 弟 1866年4月 同村へ分家
K-2	4	5	9	○			1	54.26	当主 1840年2月 大阪農人橋詰町N家ヨリ養子

家別	男	女	計	持家	借地	借家	牛	町反敵・歩	縁 組（年月・取組先）		
K-2									母	1828年4月	同村M家ヨリ娶
									妻	1860年11月	豊島郡3区榎坂村E家ヨリ娶
									長女	1879年5月	大阪豊後町I家養女
Y-1	3	5	8	○			1	171.25	母	1829年10月	同村SK家ヨリ娶
									伯母	1866年2月	豊島郡2区野畑村T家嫁
									妻	1853年2月	豊島郡3区穂積村M家ヨリ娶
									妹	1854年9月	” 嫁
									弟	1861年11月	川辺郡1区酒井村N家養子
									妹	1864年2月	豊島郡2区西市場村K家嫁
Y-2	2	2	4	○			1	29.06	母	1838年2月	同村K'-1家ヨリ娶
									姉	1871年3月	豊島郡熊野田村T家嫁
									妹	1874年5月	西成郡4区新庄村I家嫁
									妹	1878年6月	同区片山村Y家嫁
H	2	3	5	○			1	179.19	当主	1858年11月	同村S-1家ヨリ養子
									長女	1874年2月	同郡4区味舌庄屋村S家嫁
									二女	1869年3月	当村S-1家ニ養女
N-2	3	3	6	○			1	21.23	当主	1845年4月	同郡3区真砂村U家ヨリ養子
K'-1	3	3	6	○			1	94.10	母	1828年5月	同区佐井寺村ヨリ娶
									叔父	1841年4月	同郡3区西蔵垣内村Y家養子
									叔母	1837年4月	大阪曾根崎新地2丁目H家嫁
									伯母	1831年2月	同区山田下村I家嫁
									妻	1863年2月	豊島郡2区南刀根山村K家娶
									弟	1858年6月	大阪天満木幡町養子
									妹	1860年9月	同区上新田村T家嫁
K'-2	2	2	4	○			1	40.20			
K'-3	4	2	6	○			1	98.03	妻	1855年2月	同区上新田村O家ヨリ娶
									妹	1857年2月	川辺郡小戸村H家嫁
									二男	1876年12月	当村K'-4家へ養子
K'-4	3	3	6	○				40.20	当主	1876年12月	当村K'-3家ヨリ養子
M	3	2	5	○			1	14.03	母	1834年2月	同郡2区茨木村M家ヨリ娶
									伯母	1826年4月	大阪農人橋詰町N家嫁
									当主	1870年2月	豊島郡2区曾根村O家ヨリ養子
I	4	2	6	○			1	34.20	当主	1846年2月	丹波桑田郡周山村ヨリ養子
									妻	1847年8月	丹波何鹿郡新庄村ヨリ娶

家別	男	女	計	持家	借地	借家	牛	町反畝・歩	縁組 (年月・取組先)
I									弟 1873年3月 同区七番組上村N家養子 妹 1879年3月 同村Y-2家ニ嫁
N'-1	1	1	2	○			1		母 1841年8月 豊島郡2区刀弥山村ヨリ娶 弟 1877年 同村へ分家 弟 1876年 同村N'-2家へ養子
k-1	2	1	3	○			1		母 1845年3月 丹波加佐郡大里村ヨリ娶 弟 1874年3月 同村分家 弟 1874年3月 同村k-3家へ転住 妹 1872年8月 同村U家嫁
SK	3	2	5	○			1	9.03	妻 1869年2月 西成郡三津屋村I家ヨリ娶 姉 1869年2月 川辺郡2区酒井村N家嫁
k''	1	2	3	○				21.10	妹 1878年8月 島上郡野田村N家嫁
SG	3	2	5	○					妻 1857年2月 豊島郡3区小曾根村ヨリ娶
Y'-5	2		2	○					
t-1	3	1	4						伯母 1825年12月 同区片山村Y家へ嫁 妻 1845年4月 豊島郡3区长興寺村T家ヨリ娶 長女 1858年2月 豊島郡3区寺内村Y家嫁 二女 1865年12月 同区片山村Y家へ嫁
O'	2	1	3	○					母 1831年4月 同村O-1家ヨリ娶 当主 1869年2月 同区山田小川村O家ヨリ養子 妹 1856年2月 同村S-3家へ嫁
t-2	2	2	4	○					兄 1861年2月 豊島郡小曾根村K家へ養子 妻 1871年10月 大阪北大組天満十1町目ヨリ娶
I-2	2	1	3	○					○ 1869年11月 上京8番組突抜町ヨリ引越
X	2	1	3	○					姉 1865年2月 同区吹田村W家へ嫁 姉 1862年8月 同区山田別所村Y家へ嫁 兄 1866年9月 同区山田別所村H家へ養子 妻 1876年4月 同区山田別所村O家ヨリ娶
SS	1	2	3	○					当主 1877年12月 同村K-1家ヨリ養子
Ni	2	4	6	○					姉 1844年2月 同区上新田村O家へ嫁 弟 1843年2月 同区上新田村T家へ養子 弟 1855年10月 同区上新田村T'家へ養子

家別	男 女 計	持家	借地	借家	牛	町反畝・歩	縁 組（年月・取組先）
							妻 1855年2月 同区東村O家ヨリ娶 二女 1874年2月 豊島郡3区寺内村Y家へ養女
Fu	2 1 3					22.05	婿 1877年 川辺郡若鴨村源正寺ヨリ養子
D-1			○				妹 1841年4月 豊島郡3区小曾根村K家嫁 弟 1852年9月 同区山田小川村O家養子 妹 1851年2月 同郡2区茨木村Y家へ嫁 妻 1847年4月 同郡2区茨木村Y家ヨリ娶 弟 1862年11月 当村分家
D-2	3 3 6		○				妻 1863年 近江国滋賀郡坂下村ヨリ聚
U	3 3 6		○				当主 1845年3月 丹波何鹿郡赤目坂村ヨリ養子 妻 1847年4月 丹波桑田郡猪倉村ヨリ聚 長女 1872年8月 当村D-1家ニ嫁
N'-2	3 1 4		○				妻 1871年12月 大阪東大組南農人橋2丁目S家聚
B	2 3 5		○				妻 1867年 当区上村M家ヨリ娶
Ho	3 1 4		○				当主 1873年 丹波氷上郡2区鴨内村ヨリ引越 妻 1874年7月 豊島郡2区原田村A家ヨリ娶
k-2	1 2 3		○				妻 1874年2月 同村M家ヨリ娶
K'-5	2 2						妻 1873年9月 豊島郡2区南刀称山村K家ヨリ娶
y-3	2 1 3	○					当主 1874年8月 同村Y-1家ヨリ分家 妻 1875年8月 同村Y-2家ヨリ娶
k-3							当主 1874年9月 k-1家ヨリ分家 母 同 年3月 k-1家ヨリ移住 弟 同 年3月 k-1家ヨリ移住